

(Ⅳ-53) ウォーターフロント地域における視点場の景観分析 —広島県鞆の浦を事例として—

日本大学理工学部交通土木工学科 ○学生会員 飯嶋 圭
日本大学理工学部社会交通工学科 正会員 伊東 孝

1. はじめに

鞆の浦は風光明媚な港町である。この港町を広島県は、道路整備計画の一環として1983年の埋立架橋構想から、1996年には「鞆地区町づくりマスタープラン」の中に埋立架橋計画として位置づけ、新たな土地の創出と橋梁景観の創出、海上交通拠点、駐車場等の整備を図ろうとしている。埋立を行うには地元住民の合意が必要だが、現在まで合意は得られていない。住民の埋立反対理由の一つとして、景観の大きな変化があげられている。

本稿では、鞆の浦の魅力を探るため、港湾水面を対象とした視点場調査をおこない、港湾水面の見える範囲を地図上に示し、景観分析をする。あわせて県が作成した埋立架橋計画後のフォトモンタージュの問題点を抽出する。

2. 調査方法と概要

(1) 方法

鞆の浦の象徴といえる円弧型の湾内が、どこからどのように見えるのかを調べるため、ウォーターフロント地域を中心に、町を歩き、観察し、撮影を行う。風景は老若男女問わず楽しめるものであるので、誰もが時間を気にせず立ち入れる場所であり、入る際に料金が発生しない場所であることを前提とした。

使用カメラ：Sony Cyber Shot Dsc-S50、画角58°

(2) 対象地域と道路網

ウォーターフロント地域は、常夜燈、雁木等の港湾施設や、船具問屋、倉庫群など港町の特性が色濃く残り、鞆の浦の景観を語る上で欠かせない場所である。城下町であった鞆の浦は、外敵の進入を防ぐため、行き止まりの狭い道や袋小路、見通しがきかない屈曲道路などの工夫がなされている。このような特徴から、海に向かって空間の広がりを感じられる道もあれば、圧迫感のある狭い道だが、次々と移り変わるあたらしい光景に期待し、好奇心をかきたてられる道もある。

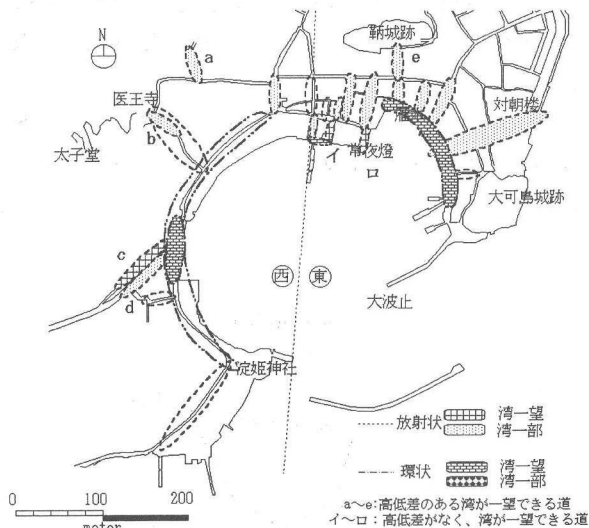


図1 鞆の浦ウォーターフロント地域の視点場分析図

3. 調査結果と景観分析

調査結果から、道を放射状と環状に類型化し、また鞆の浦を東西地域に分けて分析する(図1)。

3-1 視点場分析

(1) 環状方向

湾を取りまく道は、全長が約700mある。このうち湾を一望できる部分は約270mで、全体の約39%である。海が見えなくなっているのは、民家部分(約390m、約56%)と港湾施設(約40m、約6%)による。

(2) 放射方向

湾に向かう放射状の道は20本ある。そのうち高低の変化がなく湾の一部が見える道は9本、高低の変化があり湾の一部が見える道は4本(a,b,d,e)、一望できるポイントは高低差のないところで2つ(イ、ロ)、高低差のあるところで1つ(c)である(図1)。その他の4つは民家や構造物で海が見えなくなっている。

(3) ワンカット景観

鞆の浦には個性的な景観である「ワンカット景観」が存在する。例えば、家と海でコントラストをつくっている額縁効果のある視点場(写真1「静的額縁景観」)。

キーワード：鞆の浦、視点場、フォトモンタージュ、景観分析、ウォーターフロント

連絡先：千葉県船橋市習志野台7-24-1 日本大学理工学部社会交通工学科 都市環境計画研究室

同じく額縁効果だが、人の動きが活発で水面が見えなくなることもある視点場（写真2「動的額縁景観」）、「民家間の隙間景観」（写真3）などである。これらは、軀の浦の道路網と地形的特徴が反映された視点場である。



写真1 静的額縁景観

写真2 動的額縁景観

写真3 民家間の隙間景観

(4) 東西区域

図1の視点場分析図から、東側には水面が見える放射道路は11本、水面が見える環状道路は約190mで全体の27%である。一方西側では、水面の見える放射道路5本のうち4本は高低差のある道路である。水面が見える環状道路は約300mで、全体の約42%である。

また環状方向の水面の見え方に着目すると、港湾水面の一望できる部分は東側（全体の約27%）に、一部見えるのは西側（全体の約30%）に偏りがある。

軀の浦は、東側は港湾施設としての要素が強く、道と海岸線との距離が短い。また線としての視点場を多くふくむ。西側は道と海岸線との間に民家が立ち並んでいるので、点としての視点場（写真3）が多く見られる。地形的要素をふくむ視点場も西側に多い。

3-2 シークエンス景観

軀の浦は城下町であったことや西側の急峻な後背地の特性上、多様なシークエンス景観を得ることができ

る。例えば、常夜燈に向かう道のように徐々に空間が広がり、ランドマークである常夜燈が見えてくる「展開景観」。また医王寺に向かって坂を登っていく途中、振り返ると屋根越しからやっと湾が見え、医王寺まで行くと湾を一望できる「見返り景観」など、魅力的なシークエンス景観が得られる（図2）。

3-3 広島県作成のフォトモンタージュの問題点

県で作成したフォトモンタージュは、景観の変化が大きい場所を抽出しているが、軀の浦の景観の特徴を正しく把握していない。今回の研究では「環状方向」「多様なシークエンス景観」というように景観の連続性を大きな特徴として抽出したが、フォトモンタージュは、ある一点の場での視点場の景観分析しかしていない。景観は本来、連続的にとらえなければならない。軀の浦の景観構造を反映した正しい景観分析をしていないといえる。

4. まとめ

1) 軀の浦のウォーターフロント地域における視点場景観は、地形と道路網および家並みなどの複合的要素をふくむ。高所では町の奥行きが感じられ、平地とは違った景観を形成をしている。

軀の浦は東側に港湾施設、西側に海岸線に沿った家並みが位置している。環状方向は点（「静的額縁景観」「動的額縁景観」「民家間の隙間景観」）の、放射方向は線（「展開景観」「見返り景観」）の視点場が多く見られる。また特異点として「静的額縁景観」「動的額縁景観」という歴史的港町独特の視点場も見られた。

2) 県で作成したフォトモンタージュは、軀の浦の景観構造を正しく理解して作られていない。

本研究は、H13年度日本財団の助成金を受けたものである。

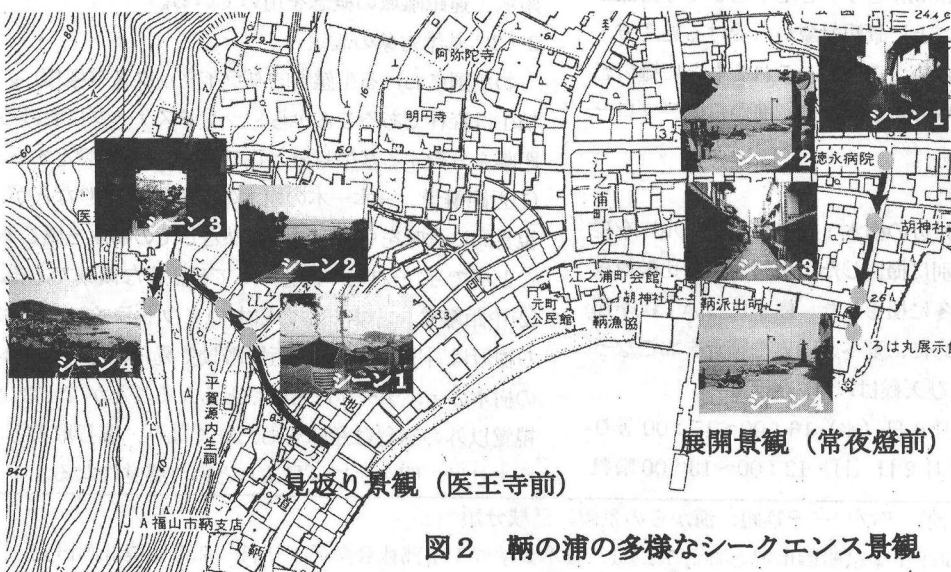


図2 軀の浦の多様なシークエンス景観